

市史編さんたより



(19)

東村山の雑木林利用の変遷

明治初年の迅速図をみると、東村山地域には平地面積の半分近くを占める雑木林が分布しています。市の南部では九道の辻を中心に分布し、市の北東部では野火止用水と空堀川にはさまれた地域に広がっていた。この状態は明治・大正期までさしたる変化なしに存続していました。雑木林と農家との間には昔から深い関係がありました。近傍の農家にとって雑木林は薪炭供給林として、また

堆肥作りのための落葉の供給林として、またには軽鬆土(風)に飛ばされ易い(瘦せ地)地帯に不可欠の防風林として大切な役割を果たしていました。

その後、多くの地域の雑木林が、昭和初年の農村恐慌期に価格暴落対策としての生産増強策として開墾され、あるいは第2次大戦前後の食料難対策や軍需のために切り開かれていきました。なかには農家の増反用、分家に開かれたものもあっ



たようです。こうして東村山の雑木林も少しずつ減少していきました。残り少なくなりかけていた東村山の雑木林を、一挙に壊滅に向けて駆り立てたのは、1960年代後半の高度経済成長に伴う都市化の進展でした。すでにこの頃、燃料

革命のために薪炭の利用価値は極度に低下し、堆肥も化学肥料の普及によりその利用価値を失っていました。こうしたころに都市化の波が押し寄せたのでした。都市化にとって雑木林は、非生産的であること、比較的一括土地所有の傾

向が強かったことの2点から、戦前は病院として、また高度経済成長期以降は自治体、住宅公社・公団、不動産資本、学校法人などによる集中的な標的になったのです。現在、市内の平場に残る雑木林は青葉町を中心に多摩湖町、恩多町等に点在しています。植生は貧弱でかわいそうですが、それでも高木のアカマツ・コナラ、クヌギ・サワラ、亜高木のエゴノキ、低木のシラカシ・エノキ・コブシなどが生え、つる草や林床植物の姿もみられます。生きている植物園として大切にしたいものです。

自然担当 新井鎮久